

### 「根原金殿」をめぐる伝承：八重山諸島・竹富島の事例を中心に

山下, 欣一 / YAMASHITA, Kinichi

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

19

(開始ページ / Start Page)

179

(終了ページ / End Page)

240

(発行年 / Year)

1992-09-18

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002765>

## 「根原金殿」をめぐる伝承

— 八重山諸島・竹富島の事例を中心に —

山下 欣一

「われわれは、一つの社会の一つの神話を出発点とする。それを分析するために、まずはじめに民族誌的コンテキストを参考にする。」(クロード・レヴィストロース) 「大橋保夫訳」<sup>(41)</sup>

### 一 はじめに

奄美、沖縄・先島諸島における民間説話資料群の整理・集成も関係者の努力によって着実に進展している現状である。また、研究活動も活発であって、一、三の注目すべき論考の発表も見聞することができる。<sup>(1)</sup>

このような現状をも勘案しつつ、主として民間説話研究の主流を占めていると考えられる系譜論、伝播論的研究とは別に、南島において、民間説話が、どのような様態を示し、かつ、どのように生成されるかについての視点から、題材を八重山諸島・竹富島の波座間御嶽の祭神根原金殿の伝承に求め、民間説話のダイナミズムとでもいべき実態にアプローチしようとするのが小論の目的である。このために、八重山諸島・竹富島の概況とあの低平で小さな島に二十八もある聖域としての御嶽をめぐる問題を要約して提示することにした。次に、主題とする波座間御嶽と根原金殿について、さらには根原金殿をめぐる伝承についての説話資料群を集成して検討することにした。さらに、波座間御嶽のトヌイムトである根原家をめぐり、ある出来事が起り、それをシャーマンであるユタが根原家の始祖根原金殿をめぐる伝承を語り、さらに関連する祭祀を行なうことを教示したという事例について述べることにしたい。そして、このことよって惹起してくる問題点について若干の考察を試みることにする。また、奄美・沖縄・先島諸島を視野におき鉄人伝承・金殿伝承などを含めた鍛冶神の伝承について検討することにした。最後に根原金殿伝承が再生成され、さらに、伝承されていくダイナミズムとでも呼ぶべき本事例をシャーマン・ユタの果している役割に重点をおき、ユタの教示によって、一定の儀礼を実修するという行為、また、これらが島全体の行事として受容され、これを実修していく事情などを総合的な観点から考察することによって、南島における説話生成の一段階の推考を試み結論としたいと考えるものである。

## 二 八重山諸島・竹富島について

### (1) 位置と自然

八重山諸島・竹富島は八重山諸島の主島である石垣島の南西約六・八キロに位置している。島の周囲八・三三キロ、面積六・三三キロで、ほとんどが隆起珊瑚礁からなるが、島の中央部付近から北の海岸にかけて一条の古生層代の珪石・粘板岩が露出している。島の中央付近のトールンゲツクと呼ぶ丘陵地点は海拔四八メートルが最高である。耕土は浅く、地下には石灰岩の洞穴が多い。土質は珊瑚礁土壌で植物の生育には不適である。石垣島、黒島、新城島、西表島とこれを結ぶ大環礁に囲まれている。行政的には日本の最南端の離島群からなる竹富町に属している。これらの離島群の有人島について大きさの順からあげると、西表島、波照間島、黒島、小浜島、竹富島、新城島(上地)、新城島(下地)、鳩間島、由布島ということになり、竹富島は五番目に位置している。

### (2) 集落

竹富島の集落はほぼ島の中央部を占め東屋敷(イノツタ)、西屋敷(インノツタ)と(仲筋(ナリシ)の三集落に分かれている。

## (3)現状

竹富島の人口は二百六十人であり、このうち六十五歳以上が四割で、その三分の一は独居老人という現状である。(一九九二年(平成4年)三月現在)

一九七〇年代の沖縄の本土復帰前後、日本列島改造プールの荒波が竹富島をも襲い、島の三分の一が島外資本に買い占められたのがきっかけで、危機感を抱いていた島の住民たちが「竹富島を生かす会」を結成、一九八六年三月「竹富島憲章」を採択し、①島外者に土地を売らない。②浜を汚さない。③島の風紀を乱さない。④景観を壊さない。⑤伝統行事、地場産業を生かす。の五ヶ条が基本理念として制定された。さらに景観保存の基金として二億円を目標に寄金を呼びかける運動を開始した。一九八七年には島の集落が国の「重要伝統的建造物保存地区」に選定された。また、これを受けて竹富町も「歴史的景観形成地区保存条例」を制定し、家屋の補修への高率補助、電話線の地下埋設を進めている。現在、八重山諸島の主島石垣島から快速船で約十五分で到着できる竹富島は、昔の沖縄の景観を維持して年間十万人の観光客を集めているユニークな島として注目をあびている現状である。<sup>(3)</sup>

## 三 竹富島の御嶽について

竹富島は低平な小島であるが拝所だけでも八十六ヶ所を数える。主要な拝所としても十六ヶ所もある。共同井戸も十三ヶ所あり、祭祀の時には全部拝んでいる。竹富島の御嶽は人々の信仰生活の基盤

を形成しており、人々の生活は御嶽とともにあるといえる。竹富島の御嶽について「琉球国由来記」には次の記載がある。

波座間御嶽 竹富村

神名、豊見ラレ山

御イベ名、ハタト大アルジ

(屋久島ヨリ御渡。根原カミトノ ヲガミ初ル)

仲筋御嶽 同 村

神名、宮島ヤ神山

御イズ名、イヘスシヤ

(ラキナワガナシヨリ御渡。アラシハナカサナリ、オガミ初ル)

幸本御嶽

神名、国ノ根ノ神山

御イベ名、モチヤイ大アルジ

(久米島ヨリ御渡。幸本フシカワラ、オガミ初ル)

久間原御嶽

神名、東久間真神山

御イベ名、友利大アルジ

(ヲキナワガナシヨリ御渡。久間原ハツ、オガミ初ル)

花城御嶽

神名、豊見ハナサウ

御イベ名、イヘスシヤカワスシヤ

(ヲキナワガナシヨリ御渡。タカネトノ、オガミ初ル)

波レ若御嶽

神名、新カシノ神山

御イベ名、袖タレ大アルジ

(徳島ヨリ御渡。塩川トノ、オガミ初ル)

右六御嶽、立始ル由来ハ、昔、竹富島ニ、波座真村根原カミトノ、中筋村アラシハナカサナリ、幸本村幸本フシカワラ、久間原村久間原ハツ、花城村タカネトノ、波レ若村塩川トノテ、時二村ノ尊長トシテ、六人心ヲ合セ、諸人ヲ愛シ居ケルガ、島ノタメ、作物ノタメ、守神拝ミタク、願居ケルニ、如レ願御神、国国島島ヨリ、御渡ノ託宣ニ、汝等念願、通達シテ、為レ島、為レ諸人ニ、守神トシテ、彼島島ヨリ渡タル由也。

六人尊長始メ、村中ノ者共、謹而拝シ、則彼山ヲ相拵、一御前ツ、勧請、拝ミ初メタル也。

この後に「国仲根所」の「神名ナシ 御イベナシ。ソノヒヤブノ御神、勧請也」として、この「国仲根所」の由来の記載があり、竹富島の項は終っている。また「八重山嶋由来記」にもほぼ同様の記事がある。

以上のような竹富島の御嶽起源について、島ではまた六山(ムーヤマ)、八山(ヤヤマ)といいほぼ、現在でも、島の諸行事の中心となって伝承されてきている。六山とは波座間御嶽、仲筋御嶽、幸本御嶽、久間原御嶽、花城御嶽、波里若御嶽をいう。これに国仲根所が「琉球国由来記」に記載されているが、竹富島出身の西塘が武富大首里大屋子(頭職)を授つて竹富島へ帰る時、首里の園比屋御嶽の神を勧請して祭つたと伝えられている。また、竹富島の島をつくつた神、島ヌチジフンヌチジシンミン加那之を祭るのが清明御嶽である。前述の六山にこれら国仲御嶽、清明御嶽の二嶽を加えたのが八山である。竹富島の人々は、それぞれこれらの御嶽に属している。そして、御嶽には女性の神司(カミツカサ)とカンマンガと呼ぶ男性の神司の祭事の補佐役がいる。さらにトヌイムトという御嶽に属する人々の中心になる家がある。御嶽の祭りの責任者であり、御嶽を創始した神の家系を世襲している家である。六山の中で、現在まで、このような家系を伝承しているトヌイムトは波座間御嶽の根原神殿(カミトノ)の直系である根原家と久間原御嶽の久間原登(ハツ)の直系細原家(久間原家)のみである。またトヌイムトの下で御嶽に関する諸行事を執行するオンブサという男性がいて御嶽に所属する人々のうちから選ばれる。主として御嶽の清掃などをするのがその仕事である。

神司（カミツカサ）は、竹富島の方言では「ヒカサ」と呼んでいるが、宮古・八重山諸島で一般的に呼ばれている「ツカサ」を使用する。各御嶽毎にツカサはツカサ集団と呼ぶべき神役集団を組織している。最上位のツカサは「フーツカサ」であり、その補佐をするのが「スンツカサ」である。三番目に「バシツカサ」のグループがいる。この神役たちの役割は、御嶽中心であり、それ以上の範囲をこえないのが原則である。ただフーツカサの病氣、出産などの時にフーツカサの補佐をするスンツカサが代理をする程度である。一九六五年（昭和40年）における波座間御嶽のツカサは次のような神名を所有しているという報告がある。

- ① フーツカサ      シマノアルジクニノアルジ
- ② スンツカサ      シーザウタインガニ
- ③ バシツカサ      ウトトウタインガニ
- ④ バンツカサ      ウーニンガン
- ⑤ キラン

またツカサは昔から次のような七つの道具を継承しており祈り道具と称している

- ① 髪束、② かんざし、③ 勾玉、④ 銅鏡、⑤ 白衣、⑥ 白袴、⑦ 香箱

竹富島の御嶽の形態をみると、まず鳥居があり、それをくぐると、白砂の敷かれた広庭に出る。その中央にバイテイン（拜殿）があり、その奥に石垣で囲まれた庭がある。これをウブという。このウ

ブの東の奥にウブ神（イビ神）として自然石や木が祭られている。ウブには男性が入ることは禁じられていて聖域となっている。御嶽内には三ヶ所に香炉がおいてある。一つは拜殿の右側においてありウブ神に「御通し」をするものである。もう一つはウブに入る入口の左側においてあるもので、現在のツカサの前任者のツカサの香炉である。この香炉にウヒアイ（合図）をしないと入ることができないことになっている。現在のツカサが死亡すると、この香炉は新しいものと取替られる。さらにウブ神の前に香炉があり、ここには二―三個が並べられている。ウブに入って掃除する時、ツカサは福木の葉を三枚取り、一葉は口にくわえ、二葉は両手にそれぞれ持ち、交互に両手を振りながら、頭を低く下げて、ウブ神の前に進み、これから掃除をしますと伝えてから始める。これが「ウブイリ」である。御嶽への帰属は男系継承が原則であるので、子どもは父方の御嶽に属することになる。しかし、実態が相違しているのは、女性が婚出する場合に新夫婦が同一御嶽に属する場合は問題はないが、新夫婦が異なる御嶽に属している場合に生まれる男の子どもたちは父方の御嶽に、女の子どもたちは母方の御嶽に属するとか、長女を除いては父方の御嶽に属するということになっているという。このような例外は、また、病氣・災苦でユタに行き、ユタの判断で御嶽の帰属を変更する場合もあるというので、この島における御嶽への帰属を複雑にしているといえる。

先に言及したように竹富島の二十八御嶽のうち中心になるのに六山、八山があるが、これとは別に村御嶽むらみづかという島全体のレベルで区分された御嶽に清明御嶽、国仲御嶽、西塘御嶽、世持御嶽がある。

このことは六山、八山のレベルから島全体のレベルへの信仰の移行が推測できるものである。<sup>(6)</sup>

#### 四 波座間御嶽―根原金殿

##### (1) 波座間御嶽

世持御嶽の西隣に位置している。「ハザマオン・ウーリヤオン・ムトゥヌヤマ・ウチイヌオン」などと呼ばれ、竹富町字竹富西屋敷（インノッタ）三九八番地にある。先に引用した「琉球国由来記」、「八重山嶋由来記」にも竹富島の御嶽のうちで第一番目に記載されているのも理解できるように本島におけるもつとも主要な御嶽であるといえる。この御嶽の創始者であり、祭神であるのは波座間村の根原金殿であり、屋久島からの渡来であるというのである。波座間御嶽のフーツカサは石川明子であるが、一九八九年（平成1年）十二月十日石垣島で死亡。享年九十二歳であった。フーツカサ、カシマンガーは欠員中である。波座間御嶽のトヌイムトは根原家である。根原家は、現在竹富町字竹富三二八番地にあり、当主は根原康（一九〇三年・明治36）六月九日生）さんである。

##### (2) 根原金殿

根原金殿は、竹富島ではネーレカンドウと呼ばれているが、また農業神としても「粟の主」であるとも伝承されている。この「金殿」というのは、宮古諸島でも伝承されていて、鍛冶神であるという

ことではほぼ同一であると考えられる。宮古諸島・宮古島平良市にある船立御嶽には「かねどの」（金殿）と「しらこにやすつかさ」という久米島から流されてきた男女神を祭るといい、また宮古島・伊良部島の比屋地御嶽の祭神は「男神あらともかね」と唱えるといい、神代に兄弟神久米島から渡海し、弟神は比屋地神になり兄神は八重山島のおもと嶽の神となったという。おなじ宮古諸島、多良間島には鍛冶神のニーリがあり、また「シツウブナカ」の祭りは「上城金殿」が始めたと伝承されており、これも鍛冶神であった。また竹富島の久間原御嶽の祭神を久間原初金殿、花城御嶽の祭神を花城金殿、白金御嶽の祭神をナリカネと呼ぶという伝承もある。さらに根原金殿は、鉄人であったという伝承もあって、鍛冶神・鉄人・英雄というイメージが形成されていたと考えてもいいものである。<sup>(7)</sup>

#### 五 根原金殿をめぐる説話資料集成

##### 資料①

竹富島ハザマ（波座間）村の尊長を勤め、勢力の強い神殿は、竹富島の六ヶ村を統一して、それから西隣の与那国島まで自分の領地にしたいたの大きな希望を持たれ、神殿は島人の寝しずまった頃、人目を忍び小船に乗って竹富の西海岸より出港し途中「ヒョー」という海で一休みし、それからもういっとき漕ぎ与那国島の島仲村という村についた。そして、その村の一女を愛人に求め、一

女より鳥の詳しい事情を聞かれ、夜明け頃までには他に知られず竹富島に帰った。神殿は、その後も折を見はからって竹富島と与那国島を人に知られず夜間航海をしていた。ところが、いつか与那国（島）の民間に知られ、島民からその一女に、根原神殿を殺し得るならば、貴方をこの島の神司と同様に祭ってやる、と頼みがあった。引き受けた一女は短刀を自分の枕元におき神殿の来床を待っていた。神殿はいつもの時間におくれず闇夜を忍んで一女の側に休まりました。一女は腹を決め神殿の体をさわりましたが一寸もやわらかいとところがなく全く鉄のようでした。幸いに首部の中心だけ少しばかり柔らかいところがありましたので神殿の睡眠中、首に一女は力一ぱい短刀をさした。神殿は「何者じゃ」と飛び上がり鉄の棒を杖にして家を飛び出し部落の中央道路まで足音を打ち鳴らしながら首に短刀をさしたまま走り回った。その音を聞いた人々は一女が神殿を生殺ししたにちがいないと上へ下への大さわぎで、闇夜に多くのけが人、死人が多く出た。遠くに逃げた人々は高い所から神殿の姿を見、口には白い飯を食べ今にも元気づいて押しかける態度だ、早く逃げようと言って遠くへ逃げました。一週間に大きな音を立てて神殿は地上にバツタリたおれました。その音は地震と同じ音でしたので与那国の人は神殿がもう押しかけてきたと思っておそろしく失神し多くの人々が死んだそうです。

右の伝説によって与那国に神しずまり賜う根原神殿の神霊を竹富島にお供する行事が施行され、昭和二十六年七月六日をもって与那国島より石川明神主外四名が神殿の神霊をハザマ（波座間）御

嶽に迎え入れた。<sup>(8)</sup>

#### 資料②

竹富島で波座間村の尊長を勤め、強い勢力をもつ根原金殿は、竹富島の六ヶ村を統一してそれから西隣りの与那国島までも自分の領地にしたとの野望を抱いていた。金殿は、島人の寝しずまつた頃、人目を忍び、小舟に乗って竹富島の西海岸から出港し、途中の「ヒョー」というところまでと休みしたのち、再び小舟をこいで無事に与那国島に着いた。そして、島仲村という村の女を愛人にして、その女から島の詳しい事情を聞いて、夜明け頃までに人に知られないように帰って来た。金殿はその後も折りを見はからって、竹富島と与那国島を夜間ひそかに航海していた。しかし、いつかそのことが与那国島の人々に知られ、島民から金殿の愛人に、根原金殿を殺したならば、あなたをこの島の神として祀りあげたいと内密に依頼があった。愛人は村人の依頼を引き受けて、短刀を自分の枕元に置き、金殿の来るのを待った。いつもの通り、時間におくれず闇夜を忍んで来て、金殿は愛人の側に休んだ。女は腹を決めて金殿の体にさわったが、どこもやわらかい部分がなく、まったく鉄のようであった。さいわい首の部分の中心に、いくらかやわらかい部分があったので、金殿の眠っているすきに、その部分に力いっぱいに短刀を刺した。金殿は、これは何者だと飛び上がって自分の鉄の棒を杖にして家を飛び出し、部落の中央道路まで足音を打ち鳴らし、首に短刀

を刺したされたまま走り続けた。その音を聞いた部落の人々は、女が金殿を生殺しにしたに違いないと思つて、上へ下への大さわぎが起つた。そのため、闇夜に自分でけがをして死ぬものが多くでた。遠くへ逃げた人々は、高い岡から金殿の姿を見て、口には白い飯を食べて今にも元気づいて押しかけてきそうだが、早く逃げようと懸命になつた。その後一週間に金殿は、大きな音を立てて地上に倒れた。その音は地震と同じ音であつたので、与那国島の人々は金殿がもう押し寄せて来たと思つて、金殿の最後の音だけで死ぬ人がずいぶんいた。金殿は死んで自分の仇討をしたのである。

この伝説から、金殿は与那国島に神として静まつたとのことで、その神霊を竹富島にお迎えする行事が昭和十六年七月六日の吉祥日、盛大に行なわれた。その際、与那国島へ石川明神司ほか四名が出かけて根原金殿の神霊を竹富島へ持ち帰つた。その神霊は波座間御嶽に祀られている。<sup>(9)</sup>

## 資料③

ええ、根原金殿が与那国島に妾を持ち毎夜通つた話をしましょう。

根原金殿はたいへんすぐれた頭を持ち、力もあり、大変な神様であつたそう。そして、与那国島にすばらしい美人の女をみつけ、夜になると、船を出し、船を漕いで、与那国島へ行き、その女と寝て、また船を漕いで夜も明けぬうちに竹富島に帰つて来たそう。

これ(根原神殿の行動)を見た、与那国島の人々はびっくりして、なんとかこの根原神殿を捕え

殺さなくてはならない。(そうしないと)俺たち与那国の島は彼に完全に征服され、彼のものになつてしまふと心配し、根原神殿を殺す相談をしたそう。そして、では、誰が彼を殺すかということになり、彼の妾に頼もう(ということになった)。これなら根原神殿といっしょに寝るんだから(その隙に殺せるだろう)これならできるといふことになつたそう。島の長老は、この女を呼んで話したそう。

「お前は、必ず根原金殿を殺せ。お前が殺したなら、お前を司(つかさ)にしよう」と。

そのころ、司になるということは大変な名誉なので、この女は嬉しく思い、

「はい」と答えたそう。

夜になり、根原金殿がやって来て寝たので、この女は刀を持って根原金殿を刺すのだが、全く刺すことができなかったそう。この男は身体全体鉄でできていたので、刀が全く通らなかつたそう。しかし、首だけは少しやわらかかつたので、首に刀を刺すことができたそう。

根原金殿は、跳び起きて走り出し、村の道の真中で鉄の杖をついて、じいっと立っていたそう。これを見た与那国島の人々はうろたえびっくりして、自分だけで勝手にびっくりして、自分だけで勝手に驚いて死ぬものもあり、熱を出すものもあつたそう。根原金殿は一週間も立ちつづけていたので、彼はまだ死んでいないと全員が心配したそう。そうしているうちに、根原金殿の口からは蛆がわき出した。これを木の上や屋根の上から見ていた与那国島の住民はまたびっくりして、木か

ら落ち、屋根から落ちてまたたくさんの人が死んだそう。口から出て来る蛆を見て、与那国島の住民は、彼が米を噛んでいると思いい、びっくりして死んだようだ。そして、十日ぐらいたって、鉄の杖をついて立っていた根原金殿はごうと倒れたそう。これを見て、またたくさんの人が死んだそう。そのような話がありますよ。<sup>(10)</sup>

## 資料④

昔、大和の国から根原金殿（ネーレカンドヌ）という武士が竹富島に渡ってきた。その武士は小さな頃から鉄の粉をまるで麦粉のように食べて成長し、青年の頃に鉄で作った櫓を使って遠い海を渡ってきた。徳の高い人で農業を広め、人民を可愛がったが、与那国島まで領地にしたと考えていた。それで与那国の島仲村の女を愛人にして、島の様子を探っていた。しかし、いつしか、そのことが島人に知られ、女は村人から金殿を殺すように頼れた。いつものように闇夜を忍んで金殿がやってきて女の隣りに休んだが、全身鉄のようで柔らかい部分がなかった。ようやく一ヶ所だけ首の中心に柔らかい部分を見つけて金殿の眠っているすきに力いっぱい短刀を突き刺した。金殿は驚いて家をとびだし、鉄の棒を杖にして部落の中央まで足音を踏み鳴らして走った。あまりの物すごさに、さては仕損じたかと部落の人たちは早まってはげがをしたり死んだりした者も多かった。金殿は立ったまま往生し、七日目に大きな音をたてて倒れたという。<sup>(11)</sup>

以上の四資料が現在までに管見の範囲で気づくことのできた説話資料群である。

資料①についての編者は竹富島出身の医師として活躍した崎山毅（一九〇〇—一九六九）でその病投後、一九七二年に遺族の手により遺稿集として刊行されたのが「蠅螂の斧—竹富島の真隨を求めて」である。本書の第十章に六〇話の説話資料が収録してある。これらの三七番目の話として「根原神殿と与那国島について」という表題の本資料が所収されている。この資料①の末尾に「昭和二十六年六月七日に与那国より石川明神主外四名が神殿の神霊をハザマ（波座間）御嶽に迎え入れた」とあるが、これは、昭和十六年六月七日の誤記であろうと考えられる。

資料②は上勢頭亨編「竹富島誌 民話・民俗編」（法政大学出版社）に収録されている記録である。本書の第一章の民話・伝説」には一〇二話が記載されていて、その四二番目に「根原金殿と与那国島の伝説」という表題で収録されている。資料①と資料②は、同一の類話である。資料②においては、ただ末尾の日時が「昭和十六年七月六日」になっている。かつて、福田晃は、南島昔話の概説を試み南島昔話の研究前史を検討した際、竹富島の説話資料群を収録したここにあげた二書について、その説話資料群の類型性を指摘し、この間の事情が明確にされるべきであろうと問題提起しているのは注目していい。<sup>(12)</sup> いずれにしても資料①、資料②については厳密な意味においての民間に伝承されている口承資料としては第二義的であるといえる。しかしながら、これらの説話が竹富島に存在していたという証左として、それなりの意味を持つてくるものである。

備考	結末	展開	発端	項目 資料
				資料①・②
昭和十六年六月七日与那国島から根原金殿の神霊を迎え入れた	①杖を手に七日間、道に立ち、口に蛆虫があるのに白い飯と思ひ、島人恐れるが倒れる。	③根原金殿の寝ている時、首の柔い部分を刀でさす	②竹富島の六ヶ村を統一し与那国島を領地にしたいと考える。	資料③
	①杖を手に七日間、道に立ち口に蛆虫があるのに白い飯と思ひ島人恐れるが倒れる。	③根原金殿の寝ている時、首の柔い部分を刀で刺す。	①与那国島・島仲村に愛人を持ち島の事情を探る	資料④
昭和十六年旧曆七月六日夜、与那国島、島仲村の墓所より香炉灰をおともし、波座間御嶽に安置した。(別記)	①杖を手に七日間、道に立ち口に蛆虫があるのに白い飯と思ひ島人恐れるが倒れる。	③根原金殿の寝ている時に首の柔い部分を刀で突きさした。	①与那国島・島仲村に愛人を持ち島の事情を探る。 ②与那国島の人々は根原金殿を殺すように頼む。	
				資料①・②
				資料③
				資料④

資料③は、資料①・資料②に比して話者が明確であるとともに、竹富島の方言との対訳も付され「鉄人の根原金殿と与那国島」と題し『竹富島・小浜島の昔話』(南島昔話叢書9・同明舎出版)に「神話・伝説」の一三話中の一番目に記録されているものである。話者は大山功(一八九二年(明治二五)十月二五日生)であり、竹富島における男性の秀れた代表的な語り手であるとされている。記録者狩俣恵一(国学院短期大学)の祖父に当る。このように資料③は口承資料として価値が高いものといえる。<sup>13)</sup>

資料④は、資料②所載の竹富島 民話・民俗編(法政大学出版局)の編者上勢頭亨が「竹富島の鍛冶伝承」(『沖縄文化研究』9)として発表した論文に記している話である。上勢頭亨は本資料を一九三五年頃、祖父上勢頭保久利から聞いたと記している。資料④は、資料①・資料②・資料③よりも、根原金殿が鉄人であることを明確にしている話といふことができよう。<sup>14)</sup>

ここにあげた四資料について、(1)発端・(2)展開・(3)結末の三項目から要約して表示してみることにはしたい。この試みは、これらの資料群についての対比を試みるためである。便宜上、資料①・資料②は同一類型として扱うことにしたい。

以上資料①～資料④までを対比してみると、根原金殿が「鉄人」であるのを明確に話しているのは資料③で体全体が鉄でできていたとしている。また資料④には全身鉄のようで柔い部分がなかったとある。資料①・資料②も体をさわってみると柔いところがなく鉄のようであったとしている。特に、四資料ともに「展開」・「結末」の部分は同一であるといえる。資料③についていえば、口承として話のリズムが伝わってくる資料であると指摘できるとともに、話すということを通じて、説話が聞かせるためには、どのような形式を持つかを書かれた資料①・②・④と対比して理解できるものである。資料①・②は文末に、資料④は別記しているが、一九四一年（昭和一六）七月六日に根原金殿の神靈を与那国島から迎えたというほとんど同じ内容の「備考」の部分は、特に竹富島での印承に残る大きな出来事であったと考えられ、根原金殿の伝承の再生成に重要な意味を持っていると思われる。次に、この出来事を中心に要約して述べることにしたい。

#### 六 根原家をめぐる出来事

根原家は前述の通り、波座間御嶽の開祖であり、屋久島から竹富島へ渡来したという伝承を持つ根原金殿の直系の家である。そして、波座間御嶽のトヌイムトでもある。

今から六一年ほど以前になる一九四一年（昭和16）に根原家をめぐる出来事が起り、それは、また、竹富島での飢餓とも関連していた。これらについて、一九九一年（平成3）一月に実施した調査な

らびに根原家をめぐる出来事について詳細に調査した亀井秀一の記述に準拠して、(1)竹富島の状況、(2)根原家の事情、(3)ユタの託宣、(4)竹富島での祭儀、(5)与那国島への旅、(6)与那国島での状況、(7)竹富島での出迎え、(8)与那国島への再度の旅の八項目に要約してみることにした。

#### (1)竹富島の状況

竹富島では、毎月「物忌」（ムヌン）と呼ぶ虫送りの行事があったという。昭和になってからは年間四回になった。「みずのえ」の日に各家から一人宛出て、畑の作物についている虫をとり、これをゴンガシヤー（くわず芋）の葉に包んで海辺へ持って下りる。波座間村の人はトモドイの浜へ、仲筋村の人はコンドイの浜へ下りる。そこにはツカサたちがいて、「バイノーラヌ島、ニーラスクの国へ行つて虫たちは生活せよ」と唱えて海に流した。この行事が終ると、みんなが天幕張りの中で、一定の時間寝る動作に入り、無言の行に入る。違反するものは、竹竿でたたかれた。時間がくると鶏の鳴き声のまねをして夜が明けたことを告げ、全員起床する。この行事は一九二〇年代まで行なわれていたという。このように害虫駆除は畑作中心の竹富島では死活の問題であった。ところが一九三八年頃から害虫、ネズミ・バッタなどが異常発生した。島の有志、ツカサたちは六山、八山を中心に各御嶽・拝所を回って虫祓いを祈願したのがその効果はなかった。

## (2) 根原家の事情

根原家の当主は根原康（一九〇三年（明治36）六月九日生）である。幼名をイーゴという。根原家の娘であり、幼時から体が小さかった。一四歳の時に石垣島まで飛行機の見物に行った時、途中のお寺で「おみくじ」をひくと、学校を卒業するとフーツカサ（大司）になってくれといわれる運を持っている。また、あなたの金箱が海の底に見える。それを取るまで死ぬなよといわれた。二一歳の時にA家から五歳年長の婿養子を迎えて結婚した。根原康が三七歳、夫の根原康栄が四二歳の頃の三年ほど前から竹富島は一大飢饉になった。害虫の異常発生があり、農作物は枯れ、蘇鉄を食べるようになり、ねずみも増加することもあった。このような状況があり、根原康にとつてもこの年までに二人の子どもを失っていた。そうして、さらにもう一人を妊娠していた。根原康は、またこの子どもまで失うのではないかと恐れていた。それで、竹富島にいる「もの知り」に伺いに行った。一人の「もの知り」は火の神の祟りであるといい、一人は「木」の祟りであるとして、それぞれの祭儀をすることを指示されたので、根原家で祭儀をしたが、害虫の発生なども、ますますひどくなってきた。思い余った根原康は（一九四一年（昭和16）六月頃のことであったが）石垣島で著名であったユタを訪ねることにした。目の不自由な高齢のユタで、根原康の声を聞くと「珍しい。神様の子どもがきた」と連呼して歓迎してくれた。そして、次のような託宣を述べたのであった。

## (3) ユタの託宣

- ① 竹富島では根原金殿を神様と祭っているが靈魂は竹富島にはおられない。
- ② 根原金殿は竹富島のためにと思い与那国島へ行ったが与那国島で殺された。一日も早く竹富島へ帰りたいので、早く、そのようにして欲しいという望みを持っている。
- ③ 根原金殿は、竹富島へ帰りたいという思いを害虫発生によって、竹富島の人々に知らせるようにしたが、誰も気づいていない。また、根原金殿は美崎御嶽への両側に琉球松と梯梧を交互に植えて並木をつくった。この並木も害虫で枯れさせたのに竹富島の有志たちは全く気づいていない。
- ④ それで、根原金殿の子孫である根原康の子どもに自分の思いを示すことにして、二人の子どもの命を奮った。もし、根原金殿の与那国島から竹富島へ帰りたいという思いを知らず、与那国島から根原金殿をお迎えしなければ、根原康のお腹の子どもの命もないだろう。
- ⑤ 要するに、根原金殿が竹富島へ帰りたいという思いを竹富島の人々へ知らすための害虫発生であり、根原康の子ども二人の命を奮ったということである

そして、根原康に竹富島へ帰り、まず波座間御嶽のフーツカサに相談し、島の有志と協議してもらい、根原金殿を竹富島へ迎えるための準備を急いで実行することを指示した。根原康は根原金殿が与那国島に葬られているなどとは知らなかったので、この託宣に驚き、ただちに竹富島へ帰った。

## (4) 竹富島での祭儀

根原康は竹富島へ帰ると、すぐフーツカサの家に行き事情を述べて島の有志たちと相談し島全体の行事として根原金殿を迎えるために準備をすることを依頼した。フーツカサは、島の現在の状況では害虫発生がつぎ飢饉であり、このような事情の時に島の人々に相談することはできないと断わった。その翌日、そのフーツカサは急死したので、「神打ち」されて死亡したと考えられた。

このような事情を知った区長をはじめとして島の有志たちは三集落の行事として、根原金殿を与那国島から竹富島へ早急に迎える行事をすることにした。急いでフーツカサを継いで新しくフーツカサになった石川明は、この日から連続して七日間、早朝から冷水を浴びて身を清め、フーツカサに就任したという。それから根原家の根原神殿の祭壇を中心に根原神殿を迎える祭儀がつづけられた。また、この祭儀と平行して、根原金殿の与那国島での埋葬した場所の調査も着手された。竹富島では石垣島から毎日、豚肉・魚などを購入して供物として供え、集落からお酒、線香などが寄せられて、每晚、六山のツカサたちと島の有志たちが集まり、祭儀を行っていた。当然、根原家も相当の経済負担をしたのであった。

## (5) 与那国島への旅

一ヶ月余の根原家の祭儀の間に、竹富島出身で与那国島に勤務していた沖縄県庁職員によって、根

原金殿の埋葬地が秘かに調査されていた。一九四一年（昭和16）七月二〇日の夜、根原家で与那国島への旅行団の責任者として前新雄三（竹富尋常小学校訓導）を区長から依頼した。そして、与那国島への旅の出発日を七月二五日と決め、根原家の当主であり康の主人である根原康栄、母マリ子、親族代表西表ナビチヤ、波座間御嶽のフーツカサ石川明の総勢五名が与那国島へ出発することにした。当時の与那国島行き定期船は焼玉式エンジンの木造船で二隻が週一回就航していた。一行は石垣島を午前九時に出発し約十時間を要して与那国島の租納港へ午後七時頃到着した。

## (6) 与那国島での状況

竹富島の一行は沖縄県庁職員である大山真正宅へ旅装をといた。翌日（七月二六日）朝、根原マリ子、西表ナビチヤ、石川明の女性三名は与那国島の高名なユタを訪ねた。そのユタは与那国島の飛行場とテンダバナ中途に古い御嶽がある。この御嶽は与那国島でもっとも古いとされていて、現在では墓の上に大木が繁茂している。墓の正面と思われる場所に直径三〇センチ位の珊瑚石をくり抜いた大きな香炉がおいてあるが、現在では参詣する人もいなくなっている。これが、根原金殿の御嶽であると思うということであった。この御嶽は先日から、大山真正が秘かに調査したものと一致したのであった。一行は与那国島の滞在三日目（七月二七日）に根原金殿の墓を訪ねた。フーツカサが香炉に線香を立て、供物を供えて祈願した。そこにトンボが五匹やってきて、香炉の上の墓石に止まり、頭

を四、五回たれて飛び去ったのに一行は啓示を受けたのであった。墓開きには、根原家の当主根原康栄が当たることになったが、大木になったガジュマルの根が強く張っていて墓を開くことができなかった。そこで、香炉の灰と墓の土をもらい竹富島へお供することを祈願して、持帰ることにした。

(7) 竹富島での出迎え

与那国島へ根原金殿を迎えに行った一行は四日目の一九四一年（昭和16）七月二十九日に竹富島へ帰ってきた。島の人々は大舛の海岸に集まり、島の有志は全員黒紋付と黒足袋、六山のツカサたちは白衣を着て出迎えた。そして、ツカサたちを先頭にして根原家へと入り、無事安着したことを報告をした。そこで、根原金殿の帰着の祭祀が行なわれた。つづいて波座間御嶽でも祭祀があり、根原金殿の神霊は波座間御嶽に合祀された。次にツカサたちは六山・八山へのお札と報告、ニラン神へのお札をすませて、すべての祭祀を終了した。

(8) 与那国島への再度の旅

一九四二年（昭和16）七月に根原金殿を与那国島から竹富島へ迎える祭祀を無事終了してから、竹富島の害虫発生も止み、畑作も農作になった。根原康も男の子を安産し、一九九二年（平成4）現在五十一歳で健在である。

この年から六年目に当たる一九四七年（昭和22）にまた、石垣島のユタから、根原神殿は無事に竹富島へ帰ることができたが、与那国島に心残りがあつた。それらは、次のようことであるという託宣があつた。①与那国島の十山神社へのお札の祭祀。②与那国島の島仲村で根原金殿が生活した時に使用した井戸へのお札の祭祀。③与那国島への海上交通に対する海へのお札の祭祀の三点であつた。

それで、今度は根原家の当主になっていた根原康が中心になり、那覇からユタ夫婦を迎え、それに二名が参加し総勢五名で与那国島へ渡り、すべての祭祀を終了して竹富島へ帰ってきた。石垣島のユタは、これですべての根原金殿の祭祀は終了したので、今後、根原家にも竹富島へもなんらの支障はないと告げた。また、この旅で根原康は、与那国島で根原金殿を殺害した女性の墓と思われる墓地を探し当て、那覇からお供してきたユタにお願ひしてその墓地で根原金殿の神霊は竹富島へもどられたか、どうかをたずねてもらつた。そうすると、根原金殿の神霊は、もう与那国島の墓地にはいない。竹富島へお帰りになつてゐるということであつた。根原康は安心して竹富島へ帰つてきたといふ<sup>15</sup>。

一九四一年（昭和16）における竹富島の波座間御嶽のトヌイムトの根原家をめぐる出来事、この出来事の三年以前の一九三八年（昭和13）から始まつた害虫発生は竹富島を飢饉の状態におとし入れていたという状況があつた。そして二人の子ども失つた根原家の根原康が竹富島のユタを訪ねたが効果はなく、さらに、石垣島のユタによつて与那国島で殺された波座間御嶽の祭神であり、竹富島の伝承上の英雄である根原金殿の神霊が竹富島への帰還を望んでいるための物知らせとして竹富島の害虫発

生があり、根原家の子ども二人の早逝も、このことを気づかせようとしているのだ、もし、早急に、このことを行なわないと、お腹にいる子どもの命もとるとの託宣がでた。この託宣に対応して、竹富島の人々は、全島をあげて、与那国島から根原金殿の神霊を迎える儀礼をすることになったし、また一九四七年（昭和22）になっても、さらに、石垣島のユタの教示に従って、再度、必要とされる儀礼を実施したのであった事情は以上の要約した通りである。ここで、注目しておきたいのは、竹富島では、これらの儀礼を終了後、すぐに害虫発生は止み、畑作物は豊作がつづいたのであり、根原家でも無事男子の出生をみて、女子四人、男子一人の五人の子どもたちも健在である現状である点である。このことは、まず、出来事があり、それに対してユタの託宣、すなわち根原金殿の話が述べられ、根原金殿の神霊が竹富島へ帰りたい思いが出来事の原因として教示される。この託宣とそれに対処するための儀礼の実修が教示されることになる。そして、この儀礼の実修が終了することによって、出来事が解決されたことを結果する。換言すれば、竹富島の人々は、その結果を眼前に体験することによって理解し、承認することをしているのである。

## 七 要約

以上、まず竹富島の概況、御嶽をめぐる問題をあげ、つづいて根原金殿をめぐる伝承資料、根原金

殿の直系であるとされる波座間御嶽のトヌイムトである根原家での出来事、ユタの託宣と儀礼の実修などについて要約しつつ述べてきたのである。ここでは、さらに総合的な観点から根原金殿伝承の説話の特質としての鉄人伝承について鍛冶神伝承も含めて検討し、次にこのような根原金殿伝承が竹富島において再生成されていき、これらが伝承へと方向づけられていく経過について、ユタの果たす役割を重視しつつ考察を試みてみることにする。最後にこれらの検討する際に浮上してくる問題点などを指摘し結論とすることにしたい。

### (1) 鉄人伝承―南島を視座にして―

すでに一九七五年に大林太良は「本朝鉄人伝奇」を発表し南島を視野に含めながら日本には鉄人伝説と呼んでいる形式の伝説があり、その特色として次の五点をあげることができるとしている。

- ①母は妊娠中鉄を食べる
- ②その結果、生まれた子供は全身鉄張りだが、ただ一カ所だけ鉄張りでないところがあった。
- ③この鉄人は成人後、武名を轟かせるが、ふつう悪玉と考えられている。
- ④ある英雄がこの鉄人と闘うが、これを討つことはできない。英雄は女（多くの場合、鉄人の母あるいは愛人）から、鉄人の泣き所がどこにあるかを知る。

⑤英雄は鉄の泣き所を攻めて、これを倒す。  
 そして、これらの特色をすべての伝承が備えているわけではなく、①―③の前半、また④―⑤の後半だけのものもあるとしている。

そして、西日本を主とするが、次のような八事例を提示している。

鉄人一号 福岡県甘木市

鉄人二号 長崎市矢上町

鉄人三号①沖繩・真壁（『遺老説伝』）

鉄人四号②沖繩・東風平村富盛

鉄人五号 出雲国八東郡森山村―弁慶

鉄人六号 愛媛県今治市―益躬

。『予章記』・『後太平記』

鉄人七号 滋賀県東浅井郡湖北町―弥三郎

鉄人八号 将門―『広益俗説弁』

以上のように大林太良は八事例をあげ、さらに視点を中国神話の蚩尤しゅうゆうに転じ、日本神話の軍神タケミカヅチ、またはコーカサスのオセッソ族の鋼鉄の英雄バトラスに共通している点、『西遊記』の孫悟空にも鉄玉を食べるモチーフがある点、『唐代伝奇集』にある「泣き所モチーフ」をあげ、遂には

ギリシア神話のアキレウスに言及し、アキレスウも一種の鋼鉄英雄であったのではないかと推測する。そして、このような問題点をもつ鉄人伝承を比較研究するために日本や東アジアにおける資料集の急務を強調しているのである<sup>16)</sup>。

大林太良の本論考は静かな水面に石が投入されたのに似て、波紋となり、刺戟と啓発を与えた。まずは事例の報告が寄せられたのであり、金属をめぐるフォクロアの解明に没頭していた谷川健一は「鍛冶屋の母」なる論考を刊行するが、大林太良の論考も本書の主題を發酵させる刺戟剤となったとしている<sup>17)</sup>。谷川健一は、本書においても南島における鉄人伝承を取り上げている。特に本書の巻末に「鍛冶神の南下」と題する論考には、本論文の主題である「根原金殿」伝承についても言及し、沖繩本島の場合、鉄は支配権力とつながった形で伝承され、宮古、八重山の場合は日本の人ひとが持つべきたという形で、神に祭られ、神格化されている。沖繩の社会は、鉄器の輸入と伝播の見られる時代とそれ以前とは明確に連うと考えている。そしてその輸入と伝播の痕跡はカニマン、オクマ、トモリなどの地名として各地に点々と残されているとしている<sup>18)</sup>。そして、また、奄美・沖繩・先島の民間説話群についての調査研究を長期にわたり精力的に実施している福田晃は「沖繩説話との比較」という論考において、①本土と共通する話型 ②南西諸島に濃密に伝承する話型 ③日本における伝承の稀なる話型 ④かって本土にも伝承された形式のある話型に分けて日本本土との比較の指標項目として、二・三の事例をあげて検討している。そして、これらの指標項目「④かって本土にも伝承された形

式」のある話型には二事例が例示されている。その第一に「根原金殿」の話をつけている。そして、この話の付記の与那国島から神霊を波座間御嶽に迎えたところ、これが真実の物語であることを示しているとし、鉄人を倒す英雄を登場させず、その愛人自らに討たせるという点にいささかの異同が察知できる。あるいは、これは、敗者の英雄側の竹富島の伝承たることを証するかも知れないとしている。そして、鉄人伝奇譚は、沖繩において、そう珍しい伝承ではないとして、沖繩本島東村の「チョウブグン親方」、沖繩本島金武町の「儀部鉄人」、沖繩本島東風平村富盛の「カニカマド」などを例示している。このような、沖繩各地に「鉄人英雄譚」が相当に濃密に伝承される要因としては、この地方には近年まで、鉄の呪力を信ずる精神風土が存在していたことをあげるべきであろうとしている。<sup>(19)</sup> 福田晃が「鉄人伝奇譚」は沖繩において、そう珍しいものではないと指摘したように、現在までに相当数の採話例が報告されている。「日本昔話通観・26・沖繩」では参考話二話を含めて一四話を提示しており「むかし語り」の「95・鉄男（原題・チョウブグン親方・梗概）」に分類されている。また、「日本昔話通観・28・昔話タイプ・インデックス」では「むかし語り」・「IV誕生」が「異常誕生」（二二話）と「運命的誕生」（二二話）に二大区分されているが、この中「134・鉄男」として「運命的誕生」に分類されている。そして、〈注〉において、異常誕生の異能を備えた人物の生涯が、その英雄的な活躍よりもその死をめぐるエピソードに重点を移し、世間話的色彩を強めている。主人公はまた「チョウブグン親方」という名で伝説的にも語られると要約している。また、このインデッ

クスには「タイプ・インデックスの比較・対照表」があるが、これによると「134・鉄男」は「AT・650」（ドラゴンの血を浴びた若者）に対応を示しているのみであり、国内・朝鮮民族・漢民族・アイヌ民族とは対応を示していない。<sup>(20)</sup> さらに、近年においても沖繩における「鉄人伝承」に関する報告がなされているが、それらは、「シマの伝説」、「広域伝説」として、「動物昔話」「本格昔話」「笑話」の次に分類されているのが多い。そして、それらの存在形式は類型を示しているのが多いが、また、他の話と結合を示すものも若干ある。<sup>(21)</sup> これらは大林太良が指摘したように「鉄人伝承」の特色としての「出生譚」と「英雄の活躍と死」の二大部分の区分は別々の独立した部分であったかも知れないという推測を考えさせるものがある。いずれにせよ近年における報告にも記録されている「鉄人伝承」は沖繩本島においては愛好された話群の一つであるのは間違いないところであろう。たとえば「猿の生肝」も南島全域において話されているが、本話について岩瀬博は、本話が古代漁撈民が持ち伝えた古層の民話と想像するならば、それは甘い幻想にすぎないとし、「猿の生肝」の濃厚な分布は「塩吹き白」「こもり」の二心」とともに、近代教育の場から拡散された可能性が大であるという点を調査した立場から指摘している。<sup>(22)</sup>

そのような事情について勘案するにしても本話の発端・展開・結末はよしんばその成立が新しいとしても南島の人々に愛好された話の一つとなって伝承されていったのは間違いないところであろう。「鉄人伝承」の沖繩本島における分布も「出生譚」と「英雄の活躍と死」の部分がおなじように話

として興味深い展開を示している点があり、愛好された話の一つとなったものであろうと考えられる。視点を南島全域に移してみると、沖繩諸島の北部に位置する奄美諸島には「鉄人伝承」については、その存在を寡聞にして現在まで知ることはできないでいる。ただ、一例だけ、それも「英雄の死」の部分、すなわち、直立して、ものすごい風をまき起こし、口にはウジ虫をわかす、そこへ敵が攻め寄せ、英雄が生きて飯を食べていると誤認し、多くのものが死ぬという話が奄美諸島の最南端の与論島の英雄「按司ニッチエー」として伝承されているのに気づく程度である。<sup>(23)</sup>

次に、宮古諸島・八重山諸島に目を転ずると、これらの島々の「鉄人伝承」として特出するのは「金殿伝承」としての「鍛冶神伝承」である。これらは、また、御嶽起源説話となっているのも多いのも特色となっている。

たとえば宮古島の「雍正日記」(一七七一・享保二二・雍正五)は首里王府へ報告した史料を編纂した旧記であるが、伊良部島の長山御嶽について次のような記載がある。

一、長山御嶽男神かねとのと唱但鉄を持渡候故かねとのと唱申由候

右由来ハ昔當鴨鉄無之耕作之働も牛馬の骨を以テとやく仕候処大和人漂着仕鉄持渡長山に栖居農具打調村中へ相渡候付テ作業漸クはか行五穀致満作人民豊に渡世仕候付作物之神を祭和人の跡を吊村中古迄ハ祭申候事<sup>(24)</sup>

また、八重山諸島の石垣島の崎原御嶽(石垣市大浜)には次のような話がある。

ひるまくい・幸地玉かねの兄弟が薩州坊泊に鋤・鎌・鎌を求めて渡り、白髪の老人から櫃をもらう。この櫃なる方向へ船を走らすべし、石垣島へ着いたら伯母か妹に櫃を開かせるようにといわれる。帰る途中、櫃が鳴るので開くと、何もなし。船は坊泊へ返り着く。件の老人に櫃を洋中で開いてはならないといいつけられる。石垣島大浜村崎原に着き、伯母・妹が開くと、神がのり移り、託宣があった。ひるまくい・幸地玉かねは新神として祭られたというのである。<sup>(25)</sup>

更に、稲村賢敷は、多良間島の「しつぷなかの神歌」として歌われている神歌は鍛冶の渡来について、明らかに、そして、美しい叙事詩として述べているとして、日本から沖繩本島へ、さらに宮古本島へ、そして多良間島へ鍛冶神が渡ったと歌っているし、さらに鍛冶神は、八重山島へ渡り、最後に与那国島へ渡ったとしている。この神は全身が黒鉄でもってつくられ、強力無比であったが、頸部にわずかな肉身があるだけであった。与那国では兇暴で一般の人々から恐れられていた。この神の妻は、睡眠中に匕首を頸部に突き入れて漸く殺害することができた。これで鍛冶神は与那国島で止り、それより西へ渡らなかつたという伝承を記録している。<sup>(26)</sup>この記録は、ここで主題としている竹富島の根原金殿の伝承により類型を示す伝承であるといえる。また森栗茂一は南島の鍛冶神を検討して、南東への鉄文化の伝播は稲村賢敷や谷川健一の研究からして、どれほど早くみつもつても一三世紀頃であろうとし、その定着は一七世紀、場合によっては一九世紀になることもあった。このことによつて島

の社会は大きく変化したとして、人々の記憶にも深く、長く残った。その結果、これらの伝承が御嶽起源説話、歌謡などに残されているとして、久米島を含めた先島諸島の一九事例群を表示している。島毎の事例は次のようである。

- 。久米島 二例
- 。宮古島 七例
- 。池間島 一例
- 。来間島 一例
- 。伊良部島 一例
- 。多良間島 一例
- 。石垣島 一例
- 。池富島 四例
- 。黒島 一例<sup>(27)</sup>

森栗茂一のあげた事例群のうち竹富島の波座間御嶽の根原金殿の伝承については、御嶽起源説話・「種子取又願イ」・「鍛冶エ狂言」にも示されているとしているが、先島諸島においても本伝承が狂

言・神口<sup>かぶち</sup>などとして多様な形式で伝承されていることが理解できるものである。

以上概観したように南島における「鉄人伝承」は民間説話としては沖縄諸島においては昔話・伝説として多く分布しているが、これらは「異常出生譚」と「英雄の活躍と死」に重点がおかれて話されている。しかして、先島諸島での「鉄人伝承」は「鍛冶神伝承」として神格化・英雄化して伝承されているといえよう。南島の北部に位置する奄美諸島には「鉄人伝承」の分布は欠落しているが鍛冶屋に対する信仰は濃密に伝承されているものである。さらに、南島における「鉄人伝承」について鉄文化という観点からする考察は南島の歴史的歩みに関連し、南島における支配者層の出現と社会の発展を意味しているとして谷川健一の強調しているように南島の歴史の検討にも主要なるテーマを提示していることも知ることができよう。<sup>(28)</sup>このような「鉄人伝承」をめぐる問題を把握した上で、次に主題である根原金殿についての検討を竹富島を視座にして試みることにしたい。

(2) 根原金殿―竹富島を視座にして―

竹富島の御嶽は六山（波座間・仲筋・幸本・久間原・花城・波里若）が中心であるといわれ、これらの御嶽を中心に六村があり、北方から渡来した、六人の指導者がいたという。

この六山の中でも勢力が強く、徳の高いのが波座間村の根原金殿であり、根原金殿は、それまで種子まき始めの式である種子取祭の日が各村毎に別々に行っていたのを「ツチノエネ」の日に統一したと

いう伝承がある。<sup>(29)</sup>このことは、竹富島最大の祭儀である「種子取祭」(国の重要無形民俗文化財)の祭日を統一した伝承であるが、根原金殿が象徴的に竹富島を統一したことを示していると理解することが出来る。竹富島の種子取祭は四九日前のツチノトイの日に「節願い」として土地と井戸を清めることから始まるが、もつといえは旧暦八月八日の「世迎い」でニライカナイから穀物の種子をいただくことから始まっているといえるという。この種子取祭は前後十日間に及ぶ大祭であるが、現在では実質的に九日間である。一九九一年の種子取祭の詳細な報告が発表されているので、主として波座間御嶽と根原金殿の直系である根原家と竹富島最大の祭儀である種子取祭の關係に焦点を当てながらみてみることにしたい。ちなみに一九九一年における「世迎い」―九月一五日、「種子取祭」―一月一〇日―一八日までであった。

第一日目 (キノエサル 一月一〇日)

トゥルッキ・無事に祭を終了することの祈願と祭儀の準備

第二日目～四日目 (一月一日～三日)

祭儀の準備

第五日目 (ツチノエネ 一月一四日)

「種子取祭」で重要な日。早朝ツカサたちは各御嶽へ参拝して、波座間御嶽へ神々が集合するように案内する。「種子取祭」は世持御嶽を中心に開催されるが、この西側に境を接して波座間御嶽があ

る。朝八時から世持御嶽での舞台設営があり、ツカサたちは波座間御嶽で祈願し、世持御嶽にもどり「種子取の祈願」をする。各家々でも戸主が根原金殿が始められたように、ツチノエネの日にまいた種子が立派に育ち、豊作になりますよという「種子取の願い」を唱え、戸主が粟の播種儀礼をする。また、この日にモチ米とモチ粟を大鍋で炊き、途中で湯を汲み出して糸芭蕉の葉を被せて蒸し、これに煮ておいた小豆を加え、ヘラで長さ約七五センチ、巾約四五センチの飯初台に流し、のしもち状にして座床の前に供える。

第六日目 (ツチノトウシ 一月一五日)

ンガソージ (精進の日)

この日は静かに過す物忌みの日。

今年初めて公民館主事になった家では「飯初戴み」がある。座床に供えてあった「飯初」に戸主の姉妹か叔母が最初に包丁を入れる「端切り」の儀式がある。午後から舞台の準備・練習がある。

第七日目 (カノエトラ 一月一六日)

第七日目と第八日目が祭儀の主要な部分である。早朝男性たちは世持御嶽にある弥勒奉安殿へ向い、朝六時に「弥勒おこし」が行なわれる。奉安殿の扇が開かれ、弥勒面が安置される。その頃、西隣の波座間御嶽ではツカサたちが種子取の祈願をし、あらかじめ案内していた六山の神々を世持御嶽へお供する。弥勒奉安殿からの男性と波座間御嶽のツカサたちが世持御嶽で合流し、「発芽の願い」と

「干鯛かえだの儀式」がある。そうしていると、突然、銅鑼と太鼓が鳴りひびき公民館主事宅へツカサを先頭に「道歌みちうた」をうたいながら向い、門を入ると「巻歌」になる。座敷で儀礼と会食があり、「稲いねが種子たねアヨウ」と「根下ねげしユンタ」がうたわれる。また一行は道歌をうたいながら世持御嶽へもどる。次に朝一〇時頃から庭の芸能、一一時頃から舞台芸能の狂言が奉納される。五時半頃舞台芸能が終了すると、世持御嶽の神前で「イバン戴かみみ」の儀式をする。これはこれから一晩中各家を廻り、翌朝再び神前までもどってくることを誓うものである。つづいて一行はツカサを先頭に道歌をうたい根原家へ向う。根原家は神の道に面し、唯一軒だけ東向きに建てられている。座床の神前には根原金殿の香炉もあるのです。ここで二回拝礼し、供えてあったニンニクとタコの和えものが下げられ、全員に小皿でふるまわれる。親戚代表が謝辞を述べる。そして「稲いねが種子たねアヨウ」と「根下ねげしユンタ」をつづけて掛け合いでうたう。このようにして根原家での行事を終了すると、各家々を「世乞せいきい」して廻る。このようにして、すでに翌朝になった五時半頃（八日目・カノトウ一月一七日）再び根原家にもどり、「世乞せいきい止め」の儀式をすませ、暗い中を道歌をうたって世持御嶽へ向い、広場で「巻歌」、「ガリーイ」の後、神前に参列し「イバン返し」が行なわれる。そして「ムイムイの願ねがい」（萌え成長することの祈願）があり、舞台では狂言が演じられる。さらに、狂言がつづいて、夕方五時半頃に終了する。

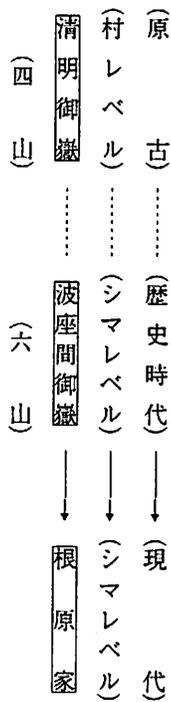
九日目（ミスノエタツ 一月一八日）

この日は後片づけの日。十日目の「物忌ものい」は一九五五年代に廃止されたので行なわれていない<sup>(30)</sup>。

以上のように竹富島の「種子取祭」の概要について一九九一年の現況の報告から要約してみた。この要約から竹富島の最大の祭儀である「種子取祭」において波座間御嶽と根原家が重要な役割を果たしていることが理解できるのである。「種子取祭」の祭場となるのは世持御嶽（ユムツオン・ハンタヌマイ）であるが、村の火の神は、古くから村の番所の構内であった。ところが明治中期に番所が廃止され、その跡に小学校が建てられた。従来火の神行事を清明御嶽へ合祀しそこで行なうことにした。しかし、ツカサたちや有志の間から従前の場所である火の神行事をしなくては困るといふ異議が起り、もとの番所の跡に新しく世持御嶽を建て、火の神を祭り、「種子取祭」などの行事をすることになった。それは一九三〇年代のことであったという。この時小学校も新しい場所に移動したのであった<sup>(31)</sup>。このような経過からみると、波座間御嶽は、もともと、もつとも古い御嶽として、島の人々の信仰の根幹にあるということになる。また根原金殿の直系である根原家も「種子取祭」の祭儀のみでなく他の祭儀の時も必ず根原家の根原金殿の香炉の前での儀礼が行なわれている。

要約すれば竹富島の根源的な源泉として波座間御嶽と竹富島の統一をなしたと伝承されている英雄根原金殿とに遡及されていくことの証左である。前に記述したように竹富島に六山と呼ぶ御嶽の他に「トウクルヌウガン」とか「村御嶽」と呼ばれる御嶽がある。これらは世持・清明・国仲・西塔の各御嶽である。この中「清明御嶽」の起源説話には「島つくりの神の話」がある。昔、天加那志大明神

より人間の島を造ってこいと命令された清明加那志しみんかなしと山を築けと命令された大本様おもとの二神が天から降りてきた。清明加那志は広い海の中にあつた小さな岩に降りた。この岩を中心として付近の石や砂利を盛り上げて作ったのが竹富島である。大本様は大本山おもとやまを築き、そこに住み、二人で協力して八つの島を造つた。これを八重山島やえやまじまと呼ぶようになったといい、この二神を清明御嶽(32)(シイマヌムトウヌウガン・マイヌオン)に祭るといふ。従つて、清明御嶽には竹富島の創世神が祭られているといえる。清明御嶽と波座間御嶽の關係についての島の人々の考え方は次のようにならう。



このように検討してみると漠然とはあるが竹富島の人々の考え方には体系があることを察知できる。そして、この場合を中心にすえられるのが「清明御嶽」であるが、それよりも、もつと身近な中心として「波座間御嶽」と「根原家」がセットなつた核的存在が位置していることが指摘できよう。

### (3) 根原金殿説話の再生成

根原金殿伝承をめぐる出来事と関連した問題については以上要約したようであるが、これらをもう

一度この出来事の発生から結末までの順序を番号を付して整理してみると次のようである。

- ① 竹富島——害虫発生・飢饉
  - ② 根原家——子ども二名の夭逝
  - ③ ユタ——託宣（金殿伝承・教示）
  - ④ 竹富島での祭儀
  - ⑤ 与那国島への旅
  - ⑥ 与那国島で金殿の墓を発見（ユタ）
  - ⑦ 竹富島で金殿の神霊を出迎える
  - ⑧ ユタの教示で与那国島への再度の旅・祭儀（神社・井戸）金殿の神霊の不在を確認（ユタ）
- これらをさらに次の四項目として整理してみると次のようにならう。

- ・ 発生 ①・②
- ・ 原因の指摘 ③
- ・ 原因の排除（祭儀）④
- ・ 祭儀の実行 ⑤・⑥・⑦・⑧

これらをこのように整理していくと、結局は「③ユター託宣（金殿伝承・教示）」の比重が重いことを知ることができる。一九四一年（昭和一六）当時において当事者であり、根原金殿の直系の子孫である根原康も根原金殿の名前については知っていても根原金殿の与那国島での非業の死については知らなかったのであった。石垣島のユタこそが、根原金殿伝承の全貌を語って聞かせたのである。そして、ただ、この伝承を語ったばかりでなく、この伝承を「真実の話」として根原金殿の神霊の思いを伝えたのである。それは根原金殿の神霊が竹富島への帰還を願っているということであり、この思いを知らせるために「①竹富島―害虫発生・飢餓」「②根原家―子ども二名の夭逝」を与えたというのである。この根原金殿の神霊の思いを達成することによってのみ「原因の排除」が可能であり、そのための祭儀を教示したのである。ユタの教示した祭儀の実修が「原因の排除」を完全に達成した時にユタの託宣・教示が実証されたことにもなる。この竹富島での事例では害虫の発生が止み、根原家では男の子どもが無事生誕したのであり、ユタの託宣すなわち根原金殿の伝承と根原金殿の神霊の思いの「真実」であることが実証されたことが容認されたのであった。ここで、まず、第一に指摘しておきたいのは、根原金殿説話の話者はユタであったという事実である。根原金殿伝承の再生成をしたのはユタである事実は、これらの出来事の資料化の作業過程で脱落するか、または、かなり弱まるという傾向があるということも、また強調しておきたいのである。

このことを先に「(五) 根原金殿をめぐる説話資料集成」における資料群について検証してみると、このことを先に「(五) 根原金殿をめぐる説話資料集成」における資料群について検証してみると、ここに再び提示することにした。このことを先に「(五) 根原金殿をめぐる説話資料集成」における資料群について検証してみると、ここに再び提示することにした。このことを先に「(五) 根原金殿をめぐる説話資料集成」における資料群について検証してみると、ここに再び提示することにした。

「右の伝説によって与那国に神しずまり賜う根原金殿の神霊を竹富島にお供する行事が施行され、昭和二十六年七月六日をもって与那国島より石川明神主外四名が神殿の神霊をハザマ（波座間）御嶽に迎え入れた。」

この文末の付記では、いわゆる祭儀に重点がおかれていて、ユタの託宣や教示は脱落しており、文章には誤認されている箇所もある。資料②は「昭和二十六年」を「昭和十六年」に訂正した他はほぼ同一である。資料③はもともと説話資料集としての性格上、これらの付記はないのは前に指摘した通りである。資料④では別記しているが、それは次のようであるので提示してみることにする。

「ところで、与那国で果てたとされる根原金殿は、その後昭和十六年旧暦七月六日夜、与那国島、島仲村の墓所より香炉灰をご神霊としておとし、波座間御嶽に安置された。これは竹富島で前年頃から島中にイモ虫が大発生し、また松並木も全滅したことから、部落会でユタ（巫女）の判断を聞いて、大司以下四名が与那国に派遣された。ところが与那国島民は固く口を閉ざして墓所を教えなかったので、十日間も滞在してやっと探しあてたという。」

これらの付記でユタ（巫女）として言及しているのは資料④のみであるが、これも伝聞のようで誤認している部分があることが確認できるものである。以上のように「ユタの託宣・教示」の部分よりも、むしろ「話」の部分が強調され、また、与那国島の神霊を竹富島へ迎えたという祭儀が記録されているのも、これが人々にとって印象的であったことが推考できるものである。そして、このような「話」と「祭儀」が竹富島の人々の根原金殿の伝承を理解する二大要素になっているということも指摘できよう。

このような伝承の資料化の作業においては、説話そのものに重点がおかれるのは当然のことであり、ユタの陰影は脱落していくものであろう。しかし、説話のダイナミックな再生成という観点からすると、むしろユタの存在こそがクロスアップされるべきであると考えられる。第二に指摘したいのはユタの視点からみると、どういふことになるかという検討の必要性なのである。石垣島のユタにとって根原金殿の伝承はカミからの教えとして話したのである。それは疑うことのできない「真実の話」であり、根原金殿の与那国島での非業の死は「歴史的出来事」であると理解しているといっている。ここでいう歴史とは厳密な時間の流れを特定するのではなく漠然たる時間の流れを意味するものであって、「過去」と換言できる考え方である。ユタは、このような前提のもとに、根原金殿の伝承を話したのである。そして、これらの前提を基盤として祭儀の実修により原因（害虫発生・天逝）を排除することができると教示したのである。すなわち根原金殿の神霊が竹富島へ帰還したいという

「死者の思い」を知り、この思いを実現するため祭儀を行なうことを内容とする指摘なのである。それは、竹富島と根原家の当面している現実的災害を解決するための方法なのである。従って、ユタの視点からすると、現実的災害の原因を、まず探求し、これが根原金殿の伝承であり、説話を再生成することによって理論的根拠を明確にしている。そして、次に根原金殿の思いを教示し、そのための祭儀の実修の必要性を強調するという順序になる。根原金殿の伝承の再生成は、ユタにとっては、カミからの教示であり、それは、また、依頼者が理解し、認容するものでなければならぬのは当然である。ここでの依頼者は根原金殿の直系である根原家の娘根原康であり、まして詳細な根原金殿の話を知りもしなかったのである。ましてやユタとは何の面識もなく、当時の交通事情からして、まさに海を越えて、石垣島へたどりつき、人の話を頼りにユタの家を訪ねたのであった。ユタの家へ入って行くユタは「カミの子どもがきた」と大声で叫び、歓待をしてくれたのであった。南島の人々は、ユタの託宣を聞くが、その託宣をどのように理解し、判断するか、さらには教示された祭儀を実修するか、しないかは依頼者側の判断によるのである。この場合には予期せざる符合により、根原康の判断は、ただちに祭儀の実修にとりかかること、いわゆるその実行へと行動することを決意させている。ユタの託宣と依頼者の判断が一致したということである。

第三に指摘できるのは竹富島の人々の認識と行動である。恐らく根原康が石垣島から帰って、まずこのことについて相談した波座間御嶽のフツカサが祭儀の実修の申し入れを拒否した翌日死去した

ことは島の人々にとって一大衝撃を与えたものであろう。このことは「カミに打たれた」という表現でフーツカサの急死を島の人々が説明したことで察知できるものである。ユタの託宣と教示は根原金殿の伝承と一致し、さらには依頼者が根原康という根原金殿の直系の家の娘であった事実もこのことを裏づけることになっている。考えてみると、根原康の石垣島のユタを訪ねるといふ行為は個人的事情から出発している。しかし、ユタの託宣と教示は、単に根原家の範囲に限定されるものでなく、集落・島レベルでの対応を必要とする内容であった。それは根原金殿が竹富島の種子取祭を統一したことで象徴的に示されるように竹富島統一の英雄であり、その偉業は説話として伝承されるとも、種子取祭の願口・巻歌などに反復されて述べられているものであった。また島での数多くの祭儀には、まず、根原家の根原金殿の香炉の前での儀礼から開始されるのである。また根原家そのものもただ一軒だけ東向きに建てられている。根原家の床座には金殿の神霊の香炉があり、根原家の西隣の道路に面した拝所があるが、これは金殿が船具の櫂を納め、与那国へ出かける前に航海安全を願った拝所とされている。庭には金殿が一夜のうちに与那国島からこぎもどって手足を洗い清めたという池も残されている。<sup>(36)</sup> いうならば根原家には根原金殿の神霊が充ち充ちているといえるのである。このことは根原家が差別化され、聖別化されているのを意味しており、島の人々の精心的中心としてのイメージを形成しているのは間違いないところである。このような背景から、根原金殿の神霊を竹富島から迎える祭儀は島レベルで行なわれているということになったものと考えられるのである。第四として主

題としてゐる出来事の一連の経過を発生から結末までを順序別に番号を付して、先に①～⑧まで整理して提示したが、これらを検討してみるとユタの活躍が注目される点が指摘できるよう。それらを抽出し整理すると次の通りになる。番号は、先に提示した整理番号である。

③ ユター託宣（金殿伝承・教示）

このユタは石垣島在住の著名なユタで根原金殿の伝承を話したユタであった。

⑥ 与那国島で金殿の墓を発見（ユタ）

このユタは与那国島在住の高名なユタで根原金殿の墓を依頼に応じて推定した。

⑧ ユタの教示で与那国島への再度の旅・祭儀（神社・井戸）・金殿の神霊の不在を確認（ユタ）

このユタは、石垣島のユタの教示で与那国島へ再度の旅をした時に同行した那覇のユタ夫婦で、金殿を殺害した女性の墓を発見し、根原金殿の神霊が竹富島へ帰還し、与那国島には不在を確認したのであった。

石垣島のユタ・与那国島のユタ・那覇のユタ夫婦が、それぞれに活躍しているが、もともと根原金殿の伝承は、英雄伝説または鉄人伝承である。この伝承が石垣島のユタによって「真実の話」として告げられたのであれば、これらは実証的に確認されなければならないのである。そのために、与那国島の根原金殿の墓が、まず第一に確認されなければ石垣島のユタの教示にある根原金殿の神霊を竹富

島へお供することはできないのである。そのために与那国島へ到着した翌朝ユタの家を訪ね教示を受けたということになる。さらには、再度の与那国島への旅において根原金殿の神霊は与那国島に不在であることの確認もユタがしているのである。いわば根原金殿の伝承のような「虚構の話」が「真実の話」として実証されるためには、主要な場面においてユタが登場しそれぞれ確認していくことによつて、祭儀が進行していくことになる。この場面ユタが示す判断によつて、「過去」と「現在」が結ばれるのであり、「虚構の話」は「真実の話」へと進展するのであることを知る事ができる。第五として指摘できる根原金殿の説話とこの説話を基盤にしてユタが教示した祭儀を検討するならば、それは根原金殿の説話そのものの再現とでもいうべきで根原金殿がしたような与那国島への旅の再現であったということである。根原金殿は与那国島への旅では「七ヨウ」という海上で一休みしたというが、「ナナヨウ」は竹富島の西方の海であるがこゝは金殿が七回擡をこいでこぎつき、こゝで一休みして与那国島へ向つたという海でありもともとユナンド（与那国渡）と呼ばれる荒海である<sup>(37)</sup>。

根原金殿が与那国島へ荒海を渡つたように与那国島へ渡り、非業の死をとげ、葬られた墓を探索することをしたのであり、そこでの祭儀にしても、やはり根原金殿の説話にそつた儀礼の旅の一段階であったといえるのである。ここでは説話が話されるように、祭儀が実修されていったということでもある。

最後に総合的視点から要約しつつ浮上してくる問題点について箇条的に述べてみよう。

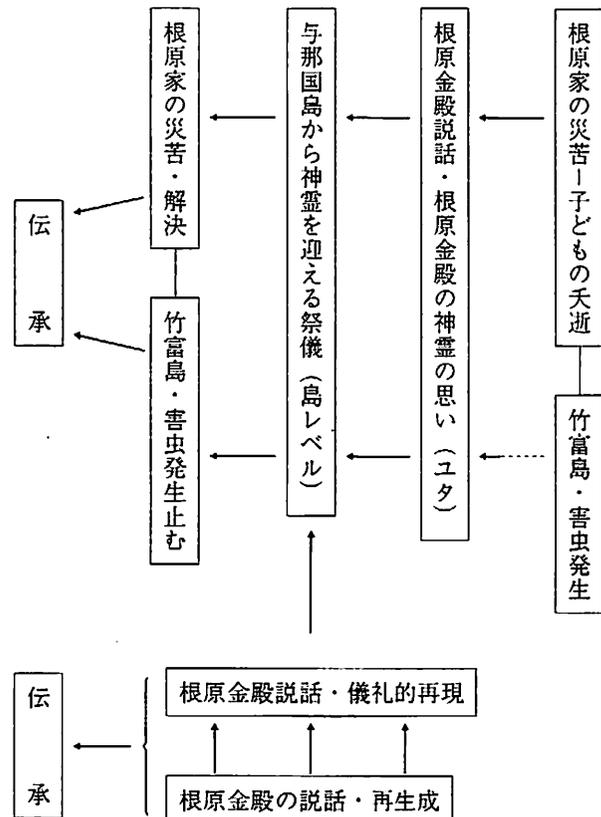
- ① 根原金殿説話はユタによつてカミの教示により再生成された。
- ② ユタによる再生成は竹富島の根原家の子どもの夭逝を避けるため、また竹富島の害虫発生の原因を除去するためのものであった。
- ③ 根原家の家レベルでのユタへの依頼は根原家の持つ竹富島での社会的・象徴的位置もあり、島レベルの問題に進展した。
- ④ このような進展も根原金殿の伝承・説話によつて根據づけられたのである。
- ⑤ 石垣島のユタの教示には美崎御嶽も根原金殿の創建した波座間御嶽への道路の両側には根原金殿が琉球松とでいごを交互に植えたが、これらをも枯れさせたというのがあった。これらは、近年刊行の文献にも記載されるようになって注目している<sup>(38)</sup>。
- ⑥ このことはユタの教示が伝承へ転化していく一過程を示していると考えられる。
- ⑦ ユタがカミからの教示として再生成した根原金殿説話は全体の構成があり、その構成の仕組を基盤としての根原金殿の神霊の思いに重点がおいて語られている。
- ⑧ 根原金殿の説話の再生成は根原金殿の神霊の思いを語るための背景となつていのである。
- ⑨ ユタの教示は、またこの根原金殿の神霊の思いを実現するための祭儀に重点がおかれていのである。

⑩ユタの根原金殿の説話の再生成は「過去」の事実としてのカミの教示の出発点ではあるが、再生成のみが目的ではないということになる。

以上のように要約できるユタの根原金殿の説話の再生成は、また、別の観点からすると、それは依頼者の直面している災害の解決の方法の教示に重点がおかれるということでもある。シャーマンであるユタが過去の事実としての根原金殿の説話を再生成するのは、ここでは依頼者の現実的災害を解決するための手段であるということになる。次にユタの教示する祭儀は、このユタの再生成した説話の旅であった。そして、結果として現実的災害が完全に解決したのであった。そうすると、島の人々の視点からすれば、結果から遡求していき、祭儀、そして根原金殿の説話という順序で再生成され、話されていくのである。当然これらが話されていくことは伝承へと方向づけられていくことになる。さらには、関係した当事者の体験談が少しづつ風化していくに従って、その伝承は変容していくことになる。しかし、この場合、ユタが説話を再生成した事実は後退し、説話の「虚構性」がそれなりの程度で「真実の話」として受容されることが優先的に選択されることになる。このような選択は、主題としている根原金殿の説話が生々と活力が与えられることを意味している。そこには波座間御嶽があり、ユタの教示による美崎御嶽と並木があり、さらには主人公である根原金殿への信仰がある。そして、また「種子取祭」などのように、歳時習俗として儀礼毎にそれは反復され、確認される。このこともまた根原金殿の説話が伝承へと方向づけがなされていることなのである。さらに、根原金殿の

非業の死を与那国島とげるといふ説話も、また、さらなる伝承へと方向づけがなされるということになる。このような波状的に一種の肥大化を示す金殿の説話をつきつめて考えると、ダイナミズムの根源はユタの根原金殿の説話の再生成にあるということを確認できるのである。そして、また、注目すべきは、もともと根原家の個人的災害についての判断を求めてユタの家を訪ねたということが出発点であった。

そして結果においては、根原家の個人的災害の解決がもたらされたのであった。ユタの根原金殿の説話の再生成は、いうならば、この解決への出発点に位置づけられるのである。このような関連を示すれば次のようになる。



以上のように整理してみると、一連の出来事は出発点から、結末まで体系として理解できる。さらに、説話からみると「根原金殿の説話の再生成」と「根原金殿の説話・儀礼的再現」はセットになり伝承へとより活力を与えられて、話されていくことになることが判明するものである。説話の伝承と比較して、一連の出来事については伝承としては一人、一人の体験談から伝聞談へと徐々に変容していくことになるものと考えられるのである。簡単にいえば、この一連の出来事は、眼前の災苦の解決に主眼点があるので、一回起性の出来事なのである。「説話の再生成」とその「儀礼的再現」は伝承への活力を与えられることになるが、一連の出来事によって、そのダイナミズムはさらに賦活されることになる。竹富島には六山の一つで仲筋御嶽(ナージオン・ムトウヌヤマ)があり、この子御嶽と伝えられる白金御嶽(ヒシユカネオン・シユガネオン)がある。イビの前に香炉一つだけおかれた御嶽である。この御嶽は仲筋御嶽のツカサが「生し繁昌、榮り繁昌、富貴繁昌」を祈願するために、仲筋御嶽の祖神を分祀して、幸本御嶽の北側に祭祀したのである。このツカサの死後、一九四六年(昭和21)頃から祭祀は絶えた。このツカサは生前はシャーマン的であり、この御嶽の祭祀は自分一代限りでいいと話してもいた。ところがこのツカサの中学校三年生の孫娘が頭痛に悩まされていて、苦しんでいた。たまたま寝室に蛇が入りこんできた。そこでユタに訪ねてみると、蛇は白金御嶽の神である。祖母の建立した御嶽を祭らなさいと教えられた。すぐに白金御嶽の祭祀(旧暦九月九日)をすると頭痛は取れ、その後の結婚生活も幸福に<sup>39)</sup>つつまれているという。ユタの判断

は、もともと物語を述べるということが基本であることを知る事ができる事例である。この事例でも、まず寝室へ入りこんできた蛇・頭痛へのユタの判断は白金御嶽の祭祀を復活することという教示がなされる。その白金御嶽は祖母の建立した御嶽でもある。この場合、白金御嶽の建立の事情は明確でないが、恐らく、シャーマン的でありツカサであった祖母へのカミの教示があったのは間違いないものである。このような事例から勘案してもユタの活躍が御嶽の祭祀儀礼の復活を教示し、それが頭痛から本復するという結末の構造は、主題としている根原金殿の伝承をめぐる問題と類型を示していることが指摘できる。

以上、主題に関して煩瑣と思えるほどその背景・説話資料群の整理・集成と分析を試みてきた。ここでは、説話についての系譜論、伝播論の観点からではなく、一つの主題と一つの島社会を取り上げ、現時点においても、今なお生々と話されている主題の検討を試みてみたのである。このような試みが、南の島々のシャーマニズムを基盤とする基層社会へのアプローチとしてのその第一歩を印するものと考えられるのである。

同時に、このような観点が日本の南の島々の特殊性を強調することを目的としているものでもないことも明確にしておきたいと考える。さらに、今後、このような検討を南の島々において地域と主題を限定して試みみるにより、南島に普遍するシャーマニズムと説話の生成ならびにこれに対応する儀礼の再現についての総合的考察を可能にするものと見通しを持つものであり、今後、さらに検討

を進めていきたいと考えるものである。<sup>(40)</sup>

(付記。竹富島調査に当たり聞き調査を快諾された根原康雄・また石垣島在住の亀井秀一氏に種々案内をいただき、さらに著書をご恵与いただいたことを深謝申しあげる)

## 注

(1) 近時刊行の代表的論考のみをあげておくことにする。

岩瀬博 一九九〇 『伝承文芸の研究―口語りと語り物』 三弥井書店

伊藤清司 一九九一 『昔話・伝説の系譜―東アジアの比較説話学』 第一書店

福田晃 一九九二 『南島説話の研究―日本昔話の原風景―』 法政大学出版局

(2) 亀井秀一 一九九〇 『竹富島の歴史と民俗』 角川書店 一九八一

狩俣恵一 一九八四 『竹富島の概況』 『竹富島・小浜島の昔話』(福田晃・狩俣恵一・花城正美 真

下厚・仲盛長秀 編) 同朋舎出版 など参照

(3) 一九九二年四月四日「竹富島憲章―揺れる先発地―沖縄からの報告」 南日本新聞(朝刊) 二二面

(4) 「琉球国由来記」一九七二 (琉球史料叢書第二巻) 東京美術 六〇三―六〇五

「八重山嶋由来記」『南島・第一話』(八重山特輯) 一九七六 八重山文化研究会 一〇一―一一

(5) 亀井秀一 『前掲書』 五〇

「琉球大学民俗研究クラブ 一九六五」『竹富島調査報告』 『沖縄民俗』第十号 九四―一〇四

山城善三・上勢頭亭 一九七一『竹富島誌』竹富島民俗館 七三―七四

- (6) 狩俣忠一 一九八四 『前掲書』 二九八
- (7) 「雍正日記」[平良市史・第三巻資料編Ⅰ・前近代] (平良市史編さん委員会編) 一九八一 平良市役所五〇
- 稲村賢敷 一九七二『宮古島庶民史』三一書店 一四五―一五七
- 上勢頭亨 一九八二『竹富島の鍛冶伝承』『沖繩文化研究』法政大学沖繩文化研究所 九六―一九七
- 森栗茂一 一九八六『他界・鍛冶屋・村落―琉球弧の鍛冶神を通して』『村構造と他界観』(鳥越憲三郎博士古稀記念会編集) 雄山閣出版 一五七―一七四
- (8) 崎山毅 一九七二『端郷の斧―竹富島の真髓を求めて』自家版 七二―一七二
- (9) 上勢頭亨 一九七六『竹富島誌』民話・民俗篇』法政大学出版局 四四―四五
- (10) 福田晃・狩俣忠一・花成正編 一九八四『竹富島・小浜島の昔話』同朋舎出版 二九―三三
- (11) 上勢頭亨 一九八二『前掲論文』六六
- (12) 福田晃 一九七九『概説篇 昔話』『沖繩地方の民間文芸(総合研究)』(福田晃編) 三弥井書店 二二―二六、八八(註9) 参照
- (13) 福田晃 一九八四『解説四伝承と伝播』「あとがき」、福田晃他編『前掲書』三二―三三、三四―
- (14) 上勢頭亨 一九八二『前掲論文』六五―七二
- (15) 上勢頭亨 一九七六『前掲書』一四五
- 亀井秀一 一九九〇『前掲書』八五―一一
- 山下欣一 一九九一・一一・二二開書
- (16) 大林太良 一九七五『本朝鉄人伝奇』『季刊民話』一九七五・春』第2号 九五―一〇六 民話と文学の会

(17) 「本朝鉄人伝奇に寄せて」『季刊民話』一九七五秋』第4号 一四七―一五一 民話と文学の会

谷川健一 一九七九『鍛冶屋の母』思案社(講談社学術文庫として一九八五年再刊)

(18) 谷川健一 一九七九『前掲書』(文庫版) 二二七―二二八

(19) 福田晃 一九七九『沖繩説話との比較』『日本昔話大成』三、研究篇(関敬吾・野村純一・大島廣志編) 角川書店 五〇―七三。特に六三―六八

(20) 「日本昔話通観・云・沖繩」(稲田浩二・小澤俊二編) 一九八三 同朋舎出版 二八八―二九一『日本昔話通観』二六・昔話タイプ・インデックス』(稲田浩二) 一九八八 同朋舎出版 二八九―二九〇―二九〇・六七二

(21) それらの二・三を例示すると次のようである。

「鉄人富盛<sup>トクイフサシ</sup>大主」『名護の昔話』一九八九 名護市教育委員会(三〇八一―三〇九) や「チヨーフグン親方」『屋部の昔話』一九九〇 名護市教育委員会(三三三―三三三) などには、登場人物の名前が富盛チヨーフグンとして類型を示しているのは注目していいものである。これらの話は、ほとんど類型を示している。①母親が妊娠中絶のため鉄類を食べる。②生れる時母親と問答する。③無敵の英雄になるが弱点がヶ所ある。④弱点をさされて英雄は死ぬ。⑤敵が攻めてくるので英雄を墓から出して座らせる。⑥口からウジがわいているのを米とまちがって、敵勢は死ぬ。

また、「チヨーフグン親方」『西原町史 別巻西原の民話』西原町役場 一九九一(六〇三―六〇八) は、ほぼ「鉄人伝承」との類型を示す話である。また同書には「治金丸とチヨーフグン親方」(六〇九―六一二) があるが、これは別の話であり、次に類語①としてあげてあるのが「蛇髻」と結合した話となっている。生れた子供がチヨーフグン親方である。この子供をアカマタがなめて鉄の肌にしたが、人に見られたので首だけは鉄にならなかった。チヨーフグン親方は自然死で、それを聞いた敵が攻めてくる。墓か

ら親方を出して、つい立て棒で支えて敵に姿を見せた。口からウジ虫のわいているのを米とまちがえて敵は死ぬ。その時に流れた血が水田に流れ、アカグチーという田芋ができた。同書(六一二)

(22) 岩瀬博 一九八七 「沖繩説話」『民間説話の研究―日本と世界―』(関敬吾博士米寿記念論文集 同朋舎出版 二三四―二四八)

山下欣一・遠藤庄治・福田晃編 一九八九『日本伝説大系・第十五巻・南島編』みずうみ書店「吉根原神殿」二八九―二九一、「土儀部鉄人」二九二―二九六、「六与論島のアジンチエ」二九七―三〇五

(23) 拙稿 一九九一 「南島の民間説話の生成と様態―与論島の一事例から―」『説話の国際比較』(説話・伝承学会編) 桜楓社 九―三一

ただし、奄美諸島では鍛冶屋についての畏怖と信仰は伝承されている。

(24) 「雍正日記」一九八一「前掲書」五〇

(25) 「八重山嶋由来記」『前掲書』一九七六 七一―八

牧野清 一九九〇 「八重山のお嶽―嶽々名・由来・祭祀・歴史―」あーまん企画 二〇三―二〇五  
この崎原御嶽内より外耳土器に混ざって鉄滓と石炭が発見されたという記事が紹介されている。

(26) 稲村賢敏 一九七二 『前掲書』五七―六

(27) 森栗茂 一九八六『前掲論文』一五七―一七四

(28) 谷川健一 一九八五 『前掲書』二二七―二三八

谷川健一 一九九一 『南島文学発論―呪謡の世界―』思潮社 四六八―四九一

(29) 上勢頭亨 一九七六 『前掲書』一七一―二〇〇

亀井秀一 一九九〇『前掲書』九四―九八など参照

(30) 上勢頭芳徳「種子取祭」「列島の神々」(日本歴史と芸能―音と映像と文字による―第十四巻)(網野善彦

他編)平凡社 一一六一―一四三

(31) 牧野清 一九九〇 『前掲書』二九一

亀井秀一 一九九〇 『前掲書』四二―四三

(32) 上勢頭亨 一九七六 『前掲書』六一―七

牧野清 一九八二 『前掲書』二九六―二九七

(33) 上勢頭亨 一九八二 『前掲論文』七二

(34) 山下欣一・遠藤庄治・福田晃編 一九八九『前掲書』二九二―二九一参照

(35) たとえば大橋英寿 一九七八 「沖繩におけるShaman(ユタ)の生態と機能―ハンジ場面観察によるClientの事例研究―」『東北大学文学部研究年報』第28号 二〇―二四六など参照

(36) 上勢頭亨 一九八二 『前掲論文』六七―六八

(37) 崎山毅 一九七二 『前掲書』七二―七三など参照

上勢頭亨 一九八二 『前掲論文』三六

(38) 亀井秀一 一九九〇『前掲書』九三・一〇四に詳細に紹介している。

牧野清 一九九〇 『前掲書』二八六

本書では「子御嶽こみづたけ 美崎・親泊両嶽は波座間御嶽分祀の子御嶽であるという伝えもある」という記述が

なされている。

(39) 亀井秀一 一九九〇 『前掲書』四五八―四五九

牧野清 一九九〇 『前掲書』三〇六

「本嶽に関して種々調査してみたが、詳しい伝説など知ることはできなかった」との記載がある。

(40) 星野普 一九九一 「ライフヒストリーという物語」・波平恵美子 一九九一 「死者についての語り」

- 『伝説が生れるとき―死者の語る物語』（波平恵美子編）福武書店 一九一―二一四・二四一など参照
- (41) クロード・レヴィ・ストロース 一九九二 「神話論―生のもとと火にかけたもの―序曲」（大橋保夫訳）『みすず』第三十四巻・第一号（通巻三七〇号）みすず書店 一一四